



上向台小だより

1月号
西東京市立上向台小学校
令和8年1月8日

<http://www.nishitokyo.ed.jp/e-kamimukoudai>

箱根駅伝に学ぶ 未来へつなぐ襷

～「一人一人の子どもを主語にする学校」を目指して～ 校長 酒見 裕子

新しい年が始まり、子どもたちの元気な声が学校に戻ってきました。

さて、毎年、学校便りで話題にしておりますが、私にとってのお正月といえば、東京箱根間往復大学駅伝競走、つまり箱根駅伝です！

今年は、青山学院大学の圧倒的な優勝に加え、大逆転の奇跡のシード権の獲得、区間新の記録ラッシュ、無念の繰り上げスタートなど、様々なドラマがありました。

そこには、本校の学校経営方針に掲げる「一人一人の子どもを主語にする学校」、そして教育目標である「人にやさしさ、自分につよさ、生き抜くかしこさ」を考える上で、大切なヒントが溢れていました。

1 「輝け大作戦」：一人一人のよさや可能性を見出す

青山学院大学は、往路・復路・総合の全てで新記録を樹立し、史上初となる2度目の3連覇を達成しました。

原晋監督が掲げた「輝け大作戦」には、「エースだけではなく、控え選手やマネージャー、チーム全員がそれぞれの立場で輝いてほしい」という願いが込められていました。

これは、本校の目指す教師像である「一人一人の子どものよさや可能性を見出す教師」、そして何より「一人一人の子どもを主語にする学校」という理念に通じるものです。

1区で16位という大きな苦戦からスタートしながらも、逆境の中でも諦めない気持ちの強さと、選手一人一人が「青学を勝たせる」という意識をもって襷（たすき）を繋いだ結果が、歴史的な大逆転と総合優勝に繋がったのです。

2 「人にやさしさ」：絆が育む真の強さ

今回の青山学院大学の走りには、もう一つの大きな意味がありました。それは、昨年2月に悪性リンパ腫のために21歳で亡くなった元チームメイト、皆渡 星七（みなわたり せな）さんへの思いです。選手たちは体に「★7」と書き込み、「星七と一緒に走る」、「天国の友にいい報告をしたい」という強い意志をもって箱根路を駆け抜けました。

このような思いは、本校の目指す「人にやさしさ」、すなわち「人や社会との『かかわり』や『つながり』を大切に思いやりのある児童」の理想的な姿です。仲間を思い、絆を力に変えて走る姿は、困難な状況下でも他者を尊重し、協働することの尊さを教えてくれました。

3 「自分につよさ」：諦めずに最後までやり抜く
一方、帝京大学が見せた「史上最大のミラクル」は、本校が育みたい「自分につよさ」を体現していました。往路17位という絶望的な状況に沈み、レース後の取材もほとんどないという悔しい思いをしながらも、彼らは「日本一諦めの悪いチーム」として前を向きました。

復路は一斉スタートだったため、競い合う相手が分からない孤独な状況で、見えないライバルとの戦いでした。それでも「自分ならできる」、「もうこれはやるしかない!」と信じて、刻々と変わる状況の中でタイムを追い、総合9位に。驚異の巻き返してシード権を獲得しました。

この「自ら心や体を鍛え、最後までやり抜く力」こそ、どんな逆境にあっても自分を見失わず、目標に向かって進み続ける「自分につよさ」の根源です。

4 「生き抜くかしこさ」：自分に合った方法で学びをデザインする

5区で歴史的快走を見せた青山学院大学の黒田朝日選手の姿からは、「生き抜くかしこさ」の在り方を学ぶことができました。黒田選手の競技スタイルは、あえて「時計を付けない」というものです。周囲のペースやタイムといった外部の情報に惑わされるのではなく、自分の身体感覚を信じ、徹底的に「自分自身をライバル」として向き合いました。他人と比較して自分を評価するのではなく、「ただ自分を信じて走る」という信念は、本校が目指す「自ら学習に向かい、自分に合った方法を選択しながら、学びをデザインする児童」の姿と重なります。

正解のない社会、予測困難な時代を生き抜くためには、自分自身を深く知り、自ら課題を設定して責任をもって行動する「生き抜くかしこさ」が求められています。

また、本校の教職員は、子どもたちの主体的な学びを支援する「伴走者」でありたいと考えています。原監督が選手たちの可能性を信じて送り出したように、私たちも子どもたちが主体的に学び方を選択し、自立した学習者となれるよう励ましてまいります。

今年も、学校・家庭・地域が当事者意識をもって連携・協働し、一人一人の子どもを主語にする学校を、本年も目指してまいります。箱根駅伝のランナーたちが繋いだ襷（たすき）のように、私たちもまた、子どもたちの未来へと大切な思いを繋いでまいりましょう。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。